

接する名取市においても教育ファームの取組みを行なっている。

仙台市は人口約103万人の政令指定都市。また、仙台のベッドタウンとして年々増加がつづいている名取市の人口は約7万3000人で、大きな消費圏を形成している。

取組内容

(1) 目的(目標)

目的：農村、農業の新たな可能性を探るために、都市と農村の資源交流による相互補完システムの整備とコーディネートを行なう。具体的な活動として、遊休農地を栽培指導型市民農園として開設し運営。

活動テーマ：「農のある暮らしへの入り口はこちらです」

目標：「100万人都市仙台と近郊農村地域との相互補完関係」

「新しい形での田園地帯の担い手づくり」

(2) 取組開始時期・経緯

仙台市のより良い街づくりのための政策提言を目的に平成11年に発足したNPO法人まちづくり政策フォーラムのなかに、「新・自給自足」をコンセプトに都市生活者と農村をつなぐシステムづくりの研究を行なう「アースワーク研究会」を立ち上げたのが始まり。

研究テーマとして市民農園に着目。遊休農地の有効利用を市民グループが行なう新しい市民農園の可能性を探ってみようと、平成12年、農家から農地を借りて農作業体験をスタート。平成19年、研究会の有志によりNPO法人 せんだいプチファームを設立し、研究会で行なってきた活動を引き継いで、その後も維持発展させている(平成21年度教育ファームモデル実証地区協力団体)。

(3) 対象作物

野菜

作物名・種類：セリ、ミウガタケ、仙台長なす、仙台ちゃ豆、サトイモ、他

選定理由：

農場長である三浦隆弘さんは名取市下余田地区代々の専業農家であり、セリやミウガタケは名取市の特産品。仙台長なすや仙台ちゃ豆は、作物名に「仙台」とついているとおり、仙台市及び近郊市町の伝統特産野菜である。そういった、伝統に根づいた地域の農産物を知り、味わってほしいとの考えから選定。

(4) 具体的な取組内容

仙台市太白区坪沼地区、同富田地区、宮城野区岩切地区の3ヶ所の遊休農地を借り上げ、富田地区は栽培指導型*1区画会員として、坪沼・岩切地区は栽培サポート型*2区画会員として募集。利用期間は最低1年。

また、三浦農場長の所有する畑や自宅の軒先で、畑の見学や作付け・収穫指導のほか、切り干し大根づくりなどを行なっている。

*1「栽培指導型」……苗や種の提供のほか、農家による指導を伴うタイプ。

*2「栽培サポート型」……要望により農家が指導を行なう自己管理タイプ。

(5)年間スケジュール

- 4月 耕転、畑開き
- 5月 作付け、畑の管理
- 6月 夏野菜作付け等の情報提供



植付け

- 7月 雑草対策
- 8月 畑での一泊キャンプ
- 9月 夏野菜収穫、秋野菜作付け
- 10月～ 秋野菜の収穫
- 11月下旬 収穫祭



収穫

(6)参加者の募集

プチファーム内の「はたけ会員」(平成21年度は50名)、「ふるさとの味伝承倶楽部」(平成21年度は30名)の両会員に、畑での農作業体験の参加の有無の確認をメールで行ない、農場の個人区画に余裕がある場合は口コミやホームページ上でお知らせし、会員募集を行なう。また、連携している団体等からの参加希望もある。

(7)経費

【富田農場】(栽培指導型農園)

- ・利用期間 5月～翌年3月
- ・1m×30mの畝(約20区画)
- ・夏野菜 苗・種+自由選択
- ・秋冬野菜 事務局のアドバイス
- ・会費1万2000円(年間)

【坪沼農場】(栽培サポート型農園)

- ・3m×6m (約14区画)
- ・会費3000円(年間)

【岩切農場】(栽培サポート型農園)

- ・5m×12m (6区画)

- ・会費1万2000円(年間)

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

関係者(団体)との連携の経緯

せんだいプチファームで中心的な役割を担っている足立千佳子事務局長と三浦隆弘農場長は、それぞれが主宰する団体のほかさまざまな団体の役員や会員となっており、それら団体間の敷居を極力低くして、興味を持った分野へ相互に気楽に参加・交流する体制を取っている。

連携を進めるに当たった課題と対処方法

関係する人たちは自分の利益にこだわらずに活動していて、最初は「これをやったらおもしろい」「わくわくする」「何か公益に資するんじゃないか」というふわふわした夢の話から始まり、「そのためにはこれをやったら面白いのでは」「あの人がこんなことを言っていた」等、アイデアをお互いに投げ込み合える雰囲気をつくっている。

コーディネーターの存在の有無

せんだいプチファーム自体が、農村や農家と都市在住者をつないでいく「コーディネーター」として設立したものであり、さまざまな団体や個人を結びつける活動を行なっている。また、プチファームを卒業した人が、自身の活動として、また別の人たちを結びつけるコーディネーターの役割も果たしている。

ほ場での運営の課題と対処方法

ほ場は、制度上、「農家個人の経営による入園方式の市民農園」という位置づけである。利用者が個々に農家から借りる形式を取るが、NPO法人が窓口となって、契約条件などの取りまとめを行なう。

農地を細分化して利用者にバラ貸しするのではなく、利用者の要望や農家のアドバイスをもとに、NPO法人が、農地全体の有効な利用計画(個別利用分・共同利用分・共同スペース^{*3}など、大まかな全体の作付け計画を作成する。

*3「共同スペース」……講義やイベント開催のための利用者の集合場所。

参加動機の高齢性(農産物の収穫だけでなく、体験や生きがいに重点を置いているなど)を踏まえ、技術的なサポートを行なう。また、植付けや生育状況、収穫などの農作業情報をメールで知らせる工夫も行なっている。収穫物は、参加者それぞれが自家消費するほか、共同耕作分を活用して、収穫祭などのイベントや新しい食材開発の試みに供している。

廃棄物処理の仕方といった、農園所在地域のルールへの配慮について利用者に周知し、地域のイベントへの参加など交流を図っている。

なお、トイレ、手洗い場、脱衣所などは農家の既存施設を借用。

安全管理

安全管理については、危険区域には柵を設けるなど、子どもが来ても安心な環境づくりをこころがけている。また、各種イベントは保険に加入した上で実施。

これまでの成果

前身である「NPO法人まちづくり政策フォーラム」から10年目を迎えた。プチファームでは、多くの入り口(栽培指導型農園、栽培サポート型農園、オーナー制農園、ランチトークショー、農のある暮らし体験等)を用意して、参加した人にさまざまな体験をしてもらっている。プチファームを卒業した人たちが、それぞれの活動エリアで連携しあう等の大きな輪として広がっている。

今後の構想、課題

せんだいプチファームは、会員や活動を増やすことを目的としていない。自分たちで活動を完結させず、プチファームの活動を「卒業」し自らが新たに中心となって活動をしていく人たちを送り出していく「媒体」と考えている。

今後も、都市住民と農村・農民とをつないでいく「おむすびびと」を増やし、単なるトレンドではない「食と農業・農地への意識関心」の掘り起こしと、耕作放棄されようとする農地の市民参加による保全が課題である。

NPO法人 せんだいプチファーム

みんなのコメント集

取組の
実践者



農業指導者
三浦隆弘

せんだいプチファームは、農業をやってみたいと考える友人やその家族や会員の方が、一緒になってひとつの畑で農作業体験できる空間です。仲間や会員同士で協力しながら、野菜や作物を栽培することができます。昨今、農的なものを体験したい人は急激に増えています。そこに癒しと安らぎがあるからでしょう。私自身農場に来て感動するのは、田畑と山々の美しさです。けれど美しい里山の田畑にも、耕作放棄地や不作付け地などの遊休農地が年々増えています。これを野放しにしておくことは、それらを創り守り続けてきたご先祖様に申し訳ないというものです。私たちの力で、この美しい田畑を守る手伝いができないだろうかと思います。なんとか、都会の人の力も借りて保全していきたいものです。

参加者

- ・「わが家は街なかに住んでいて、保育園も街なかなので、土に触れる機会が皆無に近いんですよ。公園に砂場さえ無い時代です。うちの2歳の子はちょっと邪魔になっちゃうんじゃないかしら……」なんて心配をよそに、農場長三浦さんのお子さんと一緒に、にわとり見たり、水遊びしたり、ちょっと植え付けの手伝い？もしたり、そして畑を荒らしたりしていました。ほかにも同じ2歳の子が参加していて、子どもたちは子どもたちで、楽しそう
- ・先日、芋掘り会に参加しました。知らない人たちとおしゃべりしながら一時間ほど掘りまくり……その後お弁当&お茶タイム……楽しかった。私はなんとなく参加しただけなんだけど、みんな食べもののことを真剣に考えてました。農家さんがごちそうしてくれた仙台なすのおみそ汁、ラトウユ、うまかったです。ありがとうございました。おみやげはジャガイモ、たぶん10キロくらい。洗っちゃいけないんですって。今、土がついたままベランダで干してます。何つくろうか、誰に送ろうか、思案中。



プチファームでの体験が次の活動につながっている